

令和7年度 第1回苫小牧市美術博物館協議会

日 時：令和7年11月12日（水）

14時00分～15時00分

会 場：苫小牧市美術博物館1階研修室A

出席委員 赤塚委員、内海委員、菊池委員、木村委員、斎野委員、佐藤委員、松原委員、
山田委員

欠席委員 中村委員、渡邊委員

事務局

（教育部）園田部長

（美術博物館）藤原館長、細矢主査、江崎主査、岩波主任学芸員、
沖津主任学芸員、立石主任学芸員、佐藤主任学芸員、岡本学芸員、
出水学芸員

1 開会 （進行）江崎主査

2 挨拶 園田部長

3 議事

（1）令和6年度事業報告について

（2）令和6年度苫小牧市美術博物館自己点検評価について

（3）その他

会長（議事進行）

議事1「令和6年度事業報告

」について、事務局から説明をお願いします。

事務局

それでは、令和6年度の苫小牧市美術博物館の事業報告をさせていただきます。本報告は、『年報 第12号』に基づいて進めてまいりますので、『年報』の1ページ目をお開きください。

まず最初に、「（1）展示事業」についてご説明いたします。

① 特別展「九谷赤絵の極致－宮本屋窯と飯田屋八郎右衛門の世界」は、平成25年のリニューアルオープン以来11年ぶりに陶磁器に焦点を当てた展覧会となりました。本展では、江戸後期の華麗で貴重な九谷赤絵の陶芸作品約200点を展示しました。また、全国6館で実行委員会を組織することで、単独館では実現が難しい規模の展覧会を実施することができました。

次に、「②企画展」についてご説明いたします。

令和6年度は、ご覧の3本の展覧会を実施いたしました。

「ボン・ヴォヤージュ！－アートの森へ旅にでよう」では、苫小牧ゆかりの彫刻家・藤沢レオ氏をはじめ、北海道ゆかりの美術家3名の美術作品を、アートの森に見立てた会場

に組み合わせて紹介しました。

「こどもとおとなの美術展2024～いのちと自然の造形譚(ものがたり)」では、子どもから大人まで幅広い年齢層による対話鑑賞の機会を設け、表現の多様性や豊かさについて紹介しました。

2ページ目をお開きください。

「足もとから見つける、まちの自然～苦小牧の都市(まち)の生物多様性を考える～」は、身近な自然である「市街地の自然」に焦点をあて、昆虫の大型模型や植物の立体乾燥標本、触れる標本などを展示しました。

これらの展覧会に関連する行事については、記載されている通り実施しました。

次に「③収蔵品展」についてご説明いたします。

「遠藤ミマン、モチーフを語る」は、遠藤ミマンが昭和36(1961)年に苦小牧民報に投稿したエッセイを手掛かりに、当館所蔵の遠藤ミマン作品と彼の言葉を紹介しました。

また、今回が20回目となった「④中庭展示」では、黄色のコンテナボックスなどを使った西田卓司の新作を紹介する展示を行いました。

次に常設展示内の「⑤収蔵展示室」についてご説明します。

当館の常設展示室は、1階と2階にそれぞれ「第一収蔵展示室」と「第二収蔵展示室」があり、毎年1～2回の展示替えを行っています。

令和6年度もご覧のような内容で展示替えを行いました。

3ページ目をお開きください。

「⑥2階展望ロビー展示」「⑦無料スペースにおける展示」では、学芸員が企画する小規模な展示を随時実施しており、令和6年度は、昔の道具や遺跡の発掘速報など、ご覧のとおりの内容で実施いたしました。

さらに「⑧宮沢賢治来苦(らいせん)100周年記念展」では、宮沢賢治が100年前に訪れた苦小牧駅前の風景と歴史についての資料を第2収蔵展示室に展示しました。

加えて「⑨ウトナイ湖野生鳥獣保護センター・サテライト展」では、当館所蔵のエゾユキウサギのはく製を展示しました。

次に「(2)教育普及事業」について、ご説明いたします。

「①通年プログラム」は、一貫したテーマのもと、複数回にわたって実施しているプログラムです。特に「美術博物館大学講座」では、自然、芸術、歴史、考古など様々な分野の講座を行い、前年度を上回る136名にご登録いただき、9本の講演を実施しました。

このほかのプログラムといたしましては、3ページ目から4ページ目に記載のとおり、子ども広報部「びとこま」や、古文書読解講座、考古学講座などをご覧の日程、内容で実施しました。

4ページ目をお開きください。

「②体験プログラム」は、当館に来てもらう、親しんでもらうことを目的としたプログラムです。

「美術博物館祭2024」は同日に開催した苦小牧アートフェスティバルと連携し、学芸員によるワークショップや、夜間開館に合わせたナイトプログラムなどを実施いたしました。

続いて、学芸員を講師とした「ミュージアムラボ」では、4ページ目から5ページ目に

記載のとおり、4本のプログラムを実施いたしました。

5ページ目をお開きください。

毎年、5月5日の「ゴーゴーミュージアム」や11月3日の「あみゅー秋のサンクスデー」では、すべての展示室を無料で開放し、多彩なプログラムを実施しました。特に5月5日は、とまチョップと当館の公式マスコット「トマモス」がプリントされた「うちわ」を来館者に配布しました。この「うちわ」は、苫小牧ライオンズクラブ様から子どもたちのためにと昨年の「缶バッチ」に引き続き、ご寄贈いただいたものです。また、11月3日の「あみゅー秋のサンクスデー」は、苫小牧縄文会様にご協力いただき、わくわく縄文ランドを実施しました。

このほかのプログラムとしましては、ご覧のとおり歴史見学会を1回、自然観察会を2回開催しました。

次に「④学校連携プログラム」についてご説明します。

市内の小学4年生を対象とする「郷土学習」をはじめ、国立科学博物館と共催した「教員のための博物館の日 in 苫小牧」、そして、講師と学芸員が学校へ出向く「みゅーじあむ in スクール」を実施しました。特に「教員のための博物館の日」は、参加者が66名になるなど、例年同様、多くの小中学校の先生方に受講していただきました。

6ページ目をお開きください。

「総合学習・職場体験」ですが、令和6年度は高校1校、中学校8校を受け入れました。「博物館実習の受入」は、7日間実施し、2名の大学生を受け入れました。

次に「④その他の教育普及事業」についてご説明します。

6ページ目から7ページ目にかけて記載しているとおり、今年度は「出前講座」3件、講師派遣」11件の依頼を受け、学芸員が出向き、講演や体験活動を行いました。

また、「苫小牧市アイヌ政策推進事業」では、アイヌ語に関する講演会や、体験のための子ども用のアイヌの衣服の製作を実施しました。

2024年「国際博物館の日」記念事業では、丸木舟に関するシンポジウムを国立アイヌ民族博物館と共同で開催し、基調講演のほか最新の研究成果を報告しました。

さらに「特別展夜間開館」につきまして、美術博物館祭開催日のほか、特別展の会期終了前の1週間実施いたしました。

このほか、6月9日に実施した「カムイノミ・イチャルパ」には、70名の参加がありました。

8ページ目をお開きください。

「(3) 資料の収集・保存」についてご説明いたします。

令和6年度は、美術作品5件、自然史資料1件、歴史資料2件が収蔵されました。その内容は、「②寄贈資料」のとおりとなっております。

続いて、「③利用状況」についてご説明いたします。「資料調査」としましては、ご覧の6件となっております。北海道の美術館、そして個人の方から調査を受け入れました。

9ページ目をお開きください。

令和6年度の資料の貸出は2件、貸出以外の資料の利用は12件となっております。申請元としましては、美術館などの公的機関、出版社、大学などとなっております。

10ページ目をお開きください。

「(4) 調査・研究活動」についてご説明します。

調査・研究活動は、各分野の学芸員がそれぞれテーマを設けて調査研究に取り組んでおります。令和6年度は美術と考古の研究成果を紀要で報告しております。

また、「(5) 広報・CS向上」の活動では、展覧会の図録や記録集のほか、年報や紀要、美術博物館だよりなどを発行し、電子化して公開しました。また利用者の利便性向上のため、SNSや「さくら連絡網」を通じて情報発信を行いました。

11ページ目をお開きください。

「(6) 展示室貸出事業」についてですが、令和6年度は1件の展示室貸出がありました。

「(7) 市民協働」については、当館の登録団体である「博物館友の会」、「美術館友の会」、「郷土文化研究会」、「縄文会」の支援、協働を行いました。また、ボランティア向けの研修を10回実施しました。

「(8) 埋蔵文化財の保護」については、遺跡パトロールや遺跡の所在に関する照会、市内の遺跡発掘調査を実施しました。

「(9) 大会への参加事業・研修」については、地域交流や学芸員としての研鑽を積むため、様々な大会や研修に参加しました。

12ページ目をお開きください。

「(10) その他の事業」についてご説明します。

八戸市との相互連携を図る「はちとまネットワーク」の事業では、八戸市美術館における交流ワークショップを合同で企画し、参加しました。

続きまして、「2 入館者」についてご説明いたします。

令和6年度の入館者については、合計29,350人でした。令和5年度の39,926人と比べると、1万人近く減少しております。その要因としては、観覧無料で実施した令和5年度の特別展「出光美術館近代美術名品選」の観覧者数12,433人が過去最高だったことが挙げられます。

最後となりますが、13ページ目と14ページ目にそれぞれ「令和6年度決算」と「令和7年度予算」を掲載しておりますのでご参照ください。

以上で、令和6年度美術博物館事業報告の説明を終わらせていただきます。

それでは、令和6年度の勇武津資料館の事業報告をさせていただきます。

お手元のA4一枚ものの資料をご覧ください。

はじめに、「1 教育普及事業」についてご説明いたします。

勇払の歴史をテーマにした「(1) ふるさと歴史講座」については、「蝦夷地の八王子千人同心」をテーマとする講座を行いました。

また、勇払の魅力を屋外で体験する行事「(2) ふるさと探訪」については、「勇払歴史散歩」を行いました。昔の生活体験を通じて現在を考える「(3) 生活体験教室」につきましては、ご覧のとおり7回にわたって実施しました。

このほか、八王子市との姉妹都市交流の成果となる「(4) 機織り体験教室」を計3回行いました。

続いて「2 学習・文化活動の支援」についてご説明いたします。

「(1) 勇払地区学校運営協議会事業」については、勇払小・中学校における「総合的な学習の時間」の支援の一環として、「藍染体験」を3回、「機織り体験」を1回、ご覧の日程により行いました。このほか、中学生向けに「歴史文化財現地調査」を実施しました。

「(2) サークル活動の支援」については、毎月第2・第4木曜日に活動している手織りサークル「ゆのみ」の活動支援及びその成果を紹介する作品展をご覧の期間で開催しました。

「(3) 『友の会』事業の支援・共催」については、ご覧の2回の行事を共催により実施しました。

「(4) 講師派遣」の出前講座については、明治大学校友会 北海道支部からの要請を受けて、「苫小牧の歴史」をテーマとする講座を行いました。

令和6年度全体の総括といたしましては、兼ねてより協力関係を築いてきた資料館友の会や手織りサークル「ゆのみ」の会員といった関係機関をはじめ、近隣の小中学校などとも連携を図りながら、継続的な事業の実施に取り組むことができたものと思われま

私からの説明は以上になります。

それでは、議事2 令和6年度 苫小牧市美術博物館自己点検評価について、ご説明させていただきます。

資料を2枚めくって、1ページ目をお開き願います。

1の概要にありますとおり、当館で現在行っている活動を振り返り、適正に行われているかを自己点検することで、課題や反省を自覚し、改善点の検討につなげるものでございます。

これは、博物館法第9条で、博物館の運営状況の評価を行うとともに、その結果に基づき、博物館の運営の改善を図るために、必要な措置を講ずるよう努めなければならないと規定されていることを踏まえた自己点検評価でございます。

評価指標につきましては、日本博物館協会から提供されている自己点検システムや全国の博物館等で使用されている点検項目を参考にして、作成したものでございます。

また、2の自己点検評価の流れにもありますとおり、委員の皆様にも二次評価へのご協力をお願いいたします。

2ページ以降の事業報告につきましては、先ほど年報に沿ってご報告させていただいた内容となっておりますが、10ページ以降につきましては、展示、教育普及、調査研究に分けて、それぞれの事業についての所見やアンケート結果も掲載した内容となっております。

最後に皆様へ協力をお願いしたい二次評価に係る記載方法を説明させていただきたいと思っております。送付資料の中にA3版の評価シートが同封されていたと思っておりますが、5事業全58項目の当館の自己評価を記述しております。この事業報告書や年報などを参考に7つの分野ごとに、AからDまでの評価をお願いいたします。コメントがあるときには、自由記載欄にご記載いただければと思います。

4日付で送付させていただいた本日の開催案内にもありましたとおり、皆様の評価につきましては、本日ご提出いただくか、12月5日までに郵送いただければと思います。そ

の後、皆様からいただいたご意見も含めた評価報告書を作成し、委員の皆様にお送りさせていただくとともに、HPで公表したいと考えております。

私からの説明は以上になります。どうぞよろしく願いいたします。

<質疑応答>

議長

事務局から令和6年度事業報告について及び令和6年度苦小牧市美術博物館自己点検評価について説明がありましたが、委員の皆様からご意見・ご質問はございますか。

委員

なし

議長

事務局からはなにかございますか。

館長

事務局からは特にございません。

会長

なければ、本日の議事については、これで終了させていただきたいと思えます。皆さんの議事進行のご協力をありがとうございました。

それでは、事務局にお返しします。

事務局

会長、ありがとうございました。

以上をもちまして、本日の会議を終了させていただきます。委員の皆様もありがとうございました。本日、ご出席いただき、誠にありがとうございました。